vol.505

mj "高品質力、信頼品質、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2017年8月23日発行ラインナップ
・第40回全国ハイグリーン研修会開催
・花粉症に注目のジャバラ栽培
「長谷川農園」訪問

第40回 全国ハイグリーン研修会開催

去る8月24～25日、ホテル東京ガーデンパレスにおいてエムシー・ファーテイコム㈱アミノ・ミネラルグループ主催の全国ハイグリーン研修会が開催された。全国ハイグリーン研修会としては40回目を迎え、北海道から熊本県まで全国19社のハイグリーンを取り扱う特約店が参加。報道・当社・メーカーの関係者合わせて総勢60名となり大変盛況となった。

◆地球温暖化に対応した農業技術開発

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究所
農業環境変動研究センター　温暖化研究統括監　八木一行博士

地球が温暖化しているとされているが、過去100年のうちで0.67℃上昇した。温暖化の原因は温室効果ガスの増加となっており、温室効果ガスが全くなかったら地球は－18℃となり人が住みにくい環境となる。温室効果ガスは適量に必要で、人間活動により増えすぎていることが問題となっている。また、未来100年後には現在と比べて1.1～6.4℃の幅で上昇すると予測されており、この上昇幅はこれからの温暖化対策への取り組み方次第となっている。農環研で予測した米の生産ではCO_2の増加により基本的に収量が増収する。気温が現在より4℃高くなった場合、収量が減少する地域と増収する地域があるとの予測結果がある。西日本地域は減収傾向、東北・北海道地域では増収傾向だとシュミレーションされている。一番温暖化の影響を受ける地域は近畿・東海地域と予測されたが、高温耐性品種の導入や移植日の移動など対策を講ずれば減収を防ぐことも可能である。また、高CO_2環境下では白未熟粒の増加等、品質面の低下する可能性が高いと認められている。また対策として気象対応型栽培方法の考え方としては、猛暑年で異常高温と多照年の対応としては中干し作業の短縮と背白・基白粒障害対策として追肥の増施を講じること、湿度が高い高温で日照不足と台風上陸が多い予測年では乳白粒が発生しやすい傾向があるとして、対策としては中干しを徹底し追肥を控えめにとし、籾数を減らす事で品質の低下を減少させる管理でカバーする方法があると紹介された。現在、農研機構のホームページでは早期警戒・栽培管理支援システムを立ち上げており、事前登録頂ければメッシュ農業気象データシステムにより日別予報・7日移動平均予報・27日先予報、水稲出穂日予測の提供を実施している。このシステムは登録すれば誰でも使用できる。研究センターでは、気候変動に対して農林水産業から発生する温室効果ガス濃度の上昇を抑制する取組（緩和策）や避けられない影響を軽減する緩和策も研究している。

同機構　果樹茶業研究部門　杉浦俊彦博士

果樹は水稲や野菜類とは異なり作期移動が困難な事もあり温暖化に対する適応性が低い。また、苗木を移植して即同年収穫できるものが少なく長期間かけて栽培するため３０年先を見据えた対策が必要。果樹に対する温暖化の影響は様々あり樹体への影響として日・葉焼け、凍害、晩霜害、果実では日焼け、着色不良・遅延、果実の軟化や貯蔵性低下、果肉・果皮障害、酸度低下、生理落果が挙げられる。リンゴにおいては温度上昇に伴い糖度（Brix%）は上昇するものの、酸度含有量は減少し食

（次ページへ続く）

（前ページより続く）
味が変化してしまう。温暖化に対する適応策として栽培技術による対応（遮光資材・水の利用・マルドリ栽培・反射マルチ・ブドウの環状剥皮・植調剤利用）がある。また高温耐性品種による対応として植え替えを実施し近い将来の産地ブランド維持を図る。また、果樹生産から作物を転換するのも方法のひとつである。産地作物の転換については、気候に合わせて亜熱帯果樹→柑橘→落葉果樹→寒冷地果樹の順で移動させる方法があるが、産地ブランド維持や需要と供給を見込んだ作付を考慮するべきである。

メーカーからの提案として、販売においてはメーカーの立場で体験した新規販売先への販売方法の体験談や技術情報としては最近の気象変動とハイグリーンの特徴をPRした拡販に向けた提案がなされた。いずれもタイムリーで充実した中身のある内容であった。今後の当会の益々の発展を祈念したい。

花粉症に注目のジャバラ栽培「長谷農園」

「ジャバラ」という作物をご存じですか？ジャバラの原産地は、奈良県・三重県に囲まれた日本唯一の飛び地でも有名な和歌山県北山村にもともと自生していた柑橘です。漢字では「邪払」と書きます。このジャバラは花粉症にお悩みの方々なら知らない人はいないといっても過言ではない作物です。

和歌山県工業技術センターや岐阜大医学部の研究成果によると、ジャバラはナリルチン（柑橘系フラボノイド成分）を大量に含んでいることから、花粉症の原因となるヒスタミンの分泌を緩和させる効果があると分かったため花粉症対策として火が付いた人気作物となっています。また、ジャバラはユズやカボスに近い高酸（香酸）柑橘であるため加工商品で販売される例が多く、加工食品として6次産業化の成功事例のひとつとしてマスコミにも取り上げられています。このジャバラを栽培、加工販売を手掛ける和歌山県有田郡広川町にある長谷農園に訪問しました。

同農園の経営面積は3haで、ジャバラ1 ha、有田みかん1 ha、レモン・ユズ・伊予柑等が1 ha。夫婦2名・パートさん4名で切り盛りしています。当地は中山間地で毎年鳥獣被害に悩まされており、園主は主力で栽培してきた有田みかんがこのまま鳥獣被害を受け続けると死活問題になってしまうのではないかと考え、猿が食べないジャバラを栽培し始めたそうです。当初は苗木5本からのスタート。3年かけて1000本以上の苗木を育て、木が大きくなるまで3年、結実・収穫に至るまでに更に2～3年の月日を費やしたとのこと。長谷農園と近隣の協力農園よりジャバラを集め、加工業者と共同開発を行い商品化に漕ぎ着けてきました。現在の商品アイテムはジャム・ゼリー・マーマレード・ストレート果汁・入浴剤といった商品を取り揃えており、県内の道の駅や直売所等で販売されています。花粉症に悩んでいる方は是非お試しになってみては如何でしょうか。長谷農園の商品は、「紀伊路屋」の商標で販売しており、ネットでも購入できます。http://www.kiijiya.com/

同農園では地元JAよりエムシー・ファーティコム社のアミノ酸入り有機化成をご使用されているとのこと。引き続き地域情報を発信していきたいと思います。（大阪支店）

東京では、８月に入ってから雨の日が続き、気温も上がらず肌寒い日が続きました。外で働く人には涼しいのは有難いですが、この陽気ではせっかくの夏休みが子供たちにとっては少しガッカリですね。作物への影響も心配ですので、夏らしい陽気に戻ってほしいです。　　編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp